

寄稿・辻葉子「輪かんじきの跡」(文芸社刊)を読んで

馬場駿

この本は、文字通り市井の一主婦がNHK学園の文章講座に学び、五百字詰原稿用紙三枚或いは五枚の課題に応じて書き綴った「人生の断片集」である。『あとがき』で作者は『素裸で外を歩いているような恥ずかしさ』を覚えると言っている。然しその飾り気のない素直な文章こそが読む人に感動をあたえるのだ。美しい文章だけが文芸なのではなく、美しい内容もまた文芸である。

彼女は病弱な男性に嫁ぐ。彼は「時代の罪、食糧不足」から栄養失調になり、さらには重度の結核に侵されて右肺を摘出した人だった。三級の障害者に該(あた)る。当時彼女もまた母親を癌で失い、頼った叔母にも逝かれて絶望のどん底にあった。作品はこんな二人の結婚から始まる。『肋(あばら)なき夫にかなしき夏衣』

義兄の借金の弁済、馬車馬のように働く日々、自宅の焼失、そして手放さなければならなくなった生業の電気店。作者は夫の命と都会生活を天秤にかけ、東京から伊豆へと転居する道を選ぶ。なれない土地と失意の中での癒しは、犬のチビ、インコのコロ、猫のゴン。ついには野生の狸チャーまでも。夫婦は心を優しく穏やかにする術を知っていた。『来た来たと夕餉(ゆうげ)の飯椀持ちしまま庭の狸に夫は見とる』そんな中で出遭う竹籠作りは夫婦に光明をもたらす。五十を過ぎた夫婦(めおと)徒弟は厳しい修行に耐え、結束を固める。平成四年『千鳥編花籃』で文化庁長官賞受賞。それを機に夫は健康を考慮して籠作りをやめる。

膠原病、結核、胃癌、胃潰瘍、そして作者が罹(かか)った子宮癌と、この作品には病を背負った人がたくさん登場する。それなのに読後感が爽やかなのはなぜだろう。『死を迎える心を持って初めて生の喜びを知った』という作者。しかし私には、結婚してからの彼女はずっと知っていたように思える。人を幸せにできる人は、自分で自分の幸せを演出できる人。この本はそれを私たちに教えようとしている。『谷もみじ夫に肩貸し一歩ずつ』

雪国の少女の頃、母親に寝込まれた作者は、大雪の日に祖母に蓑笠と小さな輪かんじきを着けてもらい、隣家までの雪道を作り始める。各戸に電話などない村では道こそ命だったのだ。はかどらない彼女の道。涙ぐむ彼女を救ったのは、隣の小母さんの大きな輪かんじきだった。小さな輪かんじきの跡が小母さんによって踏み固められ、厳しくも美しい雪道に変わっていく。あたかもたくさんの人や動物たちに助けられ、強く美しく歩いていく後年の作者の人生のように。いま、作者は齢七十五歳。

『母も姉も吾れより若し秋彼岸』